慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史家として見たるヘルデル
Sub Title	
Author	船田, 三郎(Funada, Saburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1940
Jtitle	哲學 No.21/22 (1940. 7) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合博士古稀記念特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000021-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史家として見たるヘルデル

船田三郎

第十八世紀、卽ちいはゆる啓蒙時代は非歷史的な時代であつたと稱せられる。しかしその非歷史的なりと稱せられる所以は如何なる點に存するであらうか。それは無論歷史の專門的研究が無かつたからではない。又それが他の時代に比して劣つてゐたからでもない。歷史研究と云ふ點から云へばそれは無かつた所ではなく、それ以前の如何なる時代にも增して盛んになつて來た時代であつた。否、それのみならず、歷史そのものゝ見方もそれ以前の時代と異なり、歷史考察の視野が著しく擴大せられ、爲めにその時代の歷史は過去の所謂世界史と異なる意味で世界史となつて來たのである。啓蒙時代以前の世界史なるものは名のみは世界史であるが、その實は西洋の歷史に過ぎなかつた。さればヴォルテールの如き

は彼以前の世界史を以て「我が西洋のみから作られた世界史と假稱する歴史」と名づけて之を嘲つた程であつたが、今は西洋のみならず、東洋の歴史もその眼界の中に入つて來た。このことはヴォルテールのEssai sur les moeurs et l'esprit des nationsや、その他當時の史家の著書によつて明かにすることが出來る。同時にこの時代の歴史の見方も亦異つて來た。文藝復興期の史家は大抵政治上の立場から歴史を觀たもので、その見方は政治史的であつたが、この世紀に於てはその着眼點を異にし、從來記述の價値なしと見做されたるものが、却つてこれ迄詳細にせられたものに比して遙かに價値あるものと見做さるゝ樣になつて來た。即ち商業、産業、法律、哲學、文學、藝術、風俗、習慣等所謂文化現象の歴史は何れも獨立の價値と意義とを有するものとして歴史記述の對象となつて來たのである。略言すればこの時代に於て始めて所謂文化史なるものが出現するに至つた。且つこれと關聯してゐることではあるが、從來の歴史は政治、軍事、外交等に關する外面に現はれた華々しき出來事を主として記述したものであつたが、今は歴史を見る眼が内的に向けられ、國民とか時代とか云ふが如きものゝ所謂エスプリを把握しようとする傾向が

生じて來たのである。かくの如く啓蒙時代の歴史記述はその視野を擴大し、同時にそれが内面化せられさへもした程であつたから、この時代の非歴史的なりと稱せらるゝ所以のものは、決して歴史研究がなかつたからとか、それが他の時代に比して劣つてゐたからとか云ふ意味ではなく、歴史が却てそれに相應しい見方を受けてゐなかつたと云ふ點から非歴史的であると云はるゝものと見ねばならぬ。歴史に相應しき見方とは然らば何であるか。それは結局如何なる民族、如何なる時代に對しても常に同感的、同情的態度を以てのぞむこと、これに對して kongeniale Betrachtung を爲すことを云ふのである。從つて非歴史的とはそれとは反對の態度で歴史を觀る事を指して云ふものと云はねばならぬ。即ちある國民やある時代を標準とし、これに照して他の時代、他の國民の文化を律する事を云ふのである。かゝる意味で非歴史的な傾向の第十八世紀に存したことは否定し得ざる事實である。一體この時代は世人の言ふが如く合理主義の時代であつた。即ちすべてを悟性に訴へて判斷し、さうしてこれに合はざるものをば悉く、從つて反合理的なるものは云ふ迄もなく、超合理的なるものをも認め得ざる時代であつた。この時

代の學者にとつてその唯一の武器は raison であつた。彼等はかゝる武器をかざして過去に向つた。彼等は過去の時代に同感することは出來なかつた。中世紀の如きは彼等から見れば、愚鈍と迷信とに充ちた無知蒙昧な所謂暗黒時代のやうにしか見えなかつた。しかし各時代は何れもそれ〴〵特殊の意義を有するものである。欲するところ、望むところ、感ずるところ、信ずる所を異にするものである。異なる時代から見れば罪過と不幸とに充ちた時代であると見ゆる時代も、その時代の人々はさうは感じなかつたであらう。それ故歴史を考察せんとする時はその考察せんとする時代の中に入つて、これと同感せねばならぬ。かくして始めて史的事實の眞が把握せらるゝのであるが、啓蒙時代の學者たちはかゝる同感的見方をなさず、却つて己れの所謂光明に照されたと思惟してゐる時代を規準として過去を考察した。かゝる點からして啓蒙時代は非歴史的なりと稱せられるのである。しかしこの時代に於ける史家や、歴史哲學者はこと〴〵くかゝる傾向に屬したものであらうか。若し然りと云はゞそれは事實に反すと云はねばならぬ。蓋しその時代の非歴史的なりと云はるゝのは、一般的傾向としてのことであつて、

もしこの時代を仔細に點檢すればこの傾向に屬せざる、否、これに反對する學者がないではなかつたからである。今こゝに述べようとするヘルデル(一七四四—一八〇三)の如き、一面から之を見ればその一人であつたと云へる。少くとも彼の一七七四年の歴史哲學、Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit は明かに非歴史的な啓蒙思想に反對する立場から歴史を觀たものと云ふことが出來る。彼は當時の多數の歴史哲學者の如く、己れの時代を尺度として古代を計るとか、歐洲人の精神を基礎として東洋民族の心理を推すとか云ふことはしなかつた。むしろ彼はかゝる見方に反對して、異なる時代、異なる民族をその場に於て見んとした。この點に於て彼の歴史認識の方法は純然たる史家の立場に近かつた。尤も彼が一七八〇年代、かの Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit. (1784—1791)を著したとき啓蒙思想に反對すると云はむよりは、むしろ積極的に自己のこの方面に關する思想を纏め上げんとしたるものゝ如く、特に Humanität を强調し、かくてこれを以て歴史に於て實現せらるべき目的と見做すに至り、爲めに純然たる史家の見方から遠ざかつたやうではあるが、しかもその中に同時に民族或は國民

を主として之を見ようとする傾向が無かつたのではない。彼の歴史哲學には宗教的、倫理的、目的論的立場から歴史を視ようとする傾向と、同時に史家として之を考察せんとするが如き傾向とが存し、この兩者が調和し得ざる觀を呈してゐる。この兩者の關係について述ぶることは他日の機會にゆづり、此處では主として彼を史家として視、その歴史に關する見解を述べてみたいと思ふ。

先づ順序としてこゝでは彼の歴史の見方、或は歴史認識の方法は如何であつたかと云ふ所に觀點を置いて述べて行きたいと思ふのである。それはこの方面の事柄が世人の特に注意する所となつてゐないやうに思はれるからであるが、この方面に於ては彼は當時の多數の學者に比し、遙かに進歩せる見解を懷き、かの十九世紀の大史家ランケのそれを想起せしむるものがある。ランケは、周知の如く、如何にあつたかを示す事を以て史家としての己れの任務としたのであるが、ヘルデルに取つても歴史は實際に在るものゝ學(Geschichte ist die Wissenschaft dessen, was da ist.)であつて、この實際に在るものをそれが在る通りに純粋に視る事、卽ち彼の言

葉をそのまゝ此處に引用すれば rein zu sehen, was da ist. を以てその主眼としてゐたのである。この言葉は一面に於ては歴史は決して單なる概念の學ではないと云ふ事を示すと俱に、又他面に於てはそれが價値的見地から考察せらるべきものではなく、却つてかゝる見地を離れて、それが純粹に視られねばならぬものであると云ふ事を云ひ表してゐるものと解する事が出來る。實際彼は先驗的理念から歴史を演繹構成したり、分析抽象して單に歴史に於ける普遍的な所をのみ考察せんとする歴史哲學に反對して、歴史は個別的ないはゆる Species facti を知るべきものと爲すと俱に、總ての價値評價的態度を歴史認識から排斥してゐるのである。これらの點に於ては彼は純客觀的態度を以て歴史に向はむとするの風があつたのである。今これを後者について觀察すれば、彼は價値的態度に反對する點に於ては自然研究家の自然現象に對すると同じ態度で歴史家の歴史を觀察すべき事を說いてゐる。自然研究家に取つては薔薇も薊も價値上何等の差別なく、スカンクとなまけものとが象と同等であるやうに人類の歴史記述家も時代と時代、民族と民族との間に價値の等級を附せず之を公平無視な態度で視なければならぬ。

彼は人類の自然史(Naturgeschichte der Menschheit.)と云ふ言葉を使用してゐる。この言葉は勿論彼の歴史の實質に關する解釋に基づく名稱ではあるが、それが又歴史の見方にも適用せられるものであることは彼の比較的晩年に著せるBriefe zur Beförderung der Humanität(1793—1797)中に掲ぐるその說明を見ても明かである。卽ち彼は此處に於ても歴史家の公平無私にして特に愛好する民族と云ふが如きものを持つべからざる事、自然研究家が自然物を觀察する場合豫めそれに等級を附せざる如く、歴史家も亦しかせざるべからざる事、民族や國民にはそれ〴〵相違する所あるが故に、その特有な存在の仕方と特有な文化とをそのまゝ觀ざるべからざること等々に就いて述べてゐるのであるが、これらの點から見て彼の歴史認識の仕方は全然客觀主義的であつたと云ふ事が出來やう。

今述べたやうに、彼は民族や國民の個性、各時代の特異性を重んじたと同時にこれを價値上同等のものと見做したのである。從つて史家は何れかの一民族を取り來つて之を理想とし、規準とし、尺度として他の民族の價値を計量してはならない。彼から觀れば理想的な彼の云はゆる人類の原型(das Urbild, der Prototyp der

Menschheit.) なるものは抽象的概念で、かゝるものは實際に於ては地上如何なる處にも存在しないからである。又一時代の形式を標準としてあらゆる世紀を規定することも避くべき事である。かゝる見地からして彼は啓蒙時代の眞唯中に在りながら極力その時代の多數の學者の歴史の見方に反對した。何人も知るが如くこの時代の學者は多くは己れのいはゆる光明に浴せりと思ひなせる時代を他の時代を計る規準とし、かくて過去の己れの時代の如くならざりしが故に之を非難した。專制政治はこの時代の人々の恰も蛇蝎の如く嫌惡する所のものであつた。勿論それはヘルデルに取つても同一で、決してその好む所ではなかつた。併しその好まざりしは實際人(プラクチカー)としての事であつて、史家としては彼はかゝる政治の行はれたる過去の民族を非難する事はしなかつた。否、現代から見て惡とせらるゝものもその時代に於ては、特に人類のいはゆる兒童時代に於ては必要でさへあつたことを認めてゐたのである。彼は一七七四年の歴史哲學の劈頭に於て東洋民族について述べ、これに附隨してその專制政治を論じて次の如く云つてゐる。世人は現代の歐洲的概念或ひは恐らくは歐洲的感情に照して專制主義を判斷し

て之より恐ろしいものがないかの如くに考へてゐるが、一體專制政治とは何であるのか。それは治者の側から云へば權威によつて、被治者の側から云へば恐怖の念に依つて存立するものであらうが、しかしその權威と云ひ恐怖と云ふのは何であるのか。一體かゝるものゝ必要なる時代は無かつたのか。乾燥にして冷靜なる理性に依つては學ぶ所なく、むしろ他に指導せられ敎育せられて一切を學ぶ時代は無かつたか。眞、善、美の理屈にはこれを聞くの耳がなく、又これを感ずるの心はないが、しかし先進者に聽從し、その云爲する所を權威とし、模範として一切を習得する時代は無かつたか。個人の幼年期はそれであるが、全人類の兒童時代に於てもかゝる事は必要缺くべからざる事である。人類のか弱き萠芽時代に於ては專制政治と稱せられるものは、實は家長の權威を以て支配する事を意味するに過ぎないのであるが、かゝる時代こそ實に人類發展の云はゞ礎石で、後の時代は皆その上に建つものである、と。彼は Ideen に於てはこの見解を幾分緩和したるが如く見ゆるも、とにかく現代を規準として過去を律すべからざる事を主張する點に於て異なる所はない。

以上の事は宗教についても云はるゝ事である。十八世紀の啓蒙哲學者、殊にヴォルテール等の反對せるは基督教であつた。この宗教に對する反感から、彼等は過去に於ける宗教を以て僧侶の欺瞞に基づくものなるかの如く思惟した。併しヘルデルに依れば宗教的精神は古代に於ては必要缺くべからざるものであつた。最古の哲學や政治形態は如何なる國に於ても神學であり、神政政治ではなかつたか。人は視る前に凝視する。この凝視に依つてのみ眞と美の理念に達し、歸依と服從とによつて始めて善を所有する。兒童の知識は抽象的理論や哲學的論證によつて獲られるでない。か弱き心情に於ける信、望、愛こそすべての知識の種子である。彼はかゝる宗教的態度を愚鈍、迷信とし、歸依と服從を奴隷と見、宗教を以て僧侶の欺瞞と爲すの如何に愚なるかを嘲けり、啓蒙時代の人々の己れの時代を標準として過去を計るを非難してゐるのである。

上述の如く彼にあつては現代を以て他の時代を律してはならぬやうに過去の民族を價値評價の規範とする事も、その立場からみて到底不可能である。ギリシヤの詩や藝術は當時この方面にたづさはる詩人、文藝批評家、藝術家等に依つて曾

て創られたる最高のもので、他の時代や民族はこれを理想とし、模範とし、法則と爲すべきものと解せられた。併し、よしギリシャの藝術が最高至上のものであるにしてもやはり歴史的に制約せられたもので、之を以て異なる時代や民族のそれを計る絶對的標準と爲すことは出來ない。彼は Jede menschliche Vollkommenheit ist national, säkular und am genauesten betrachtet, individuell. と云つてゐる樣に、ギリシャの藝術と雖、やはり國民的なものであつた。從つて之に依つて他の國民の藝術を批判する事は決して當を得たることとは云へない。この點に於て彼はエヂプトの藝術をギリシャ藝術を標準として解釋するヴィンケルマンに反對してゐるのである。且つギリシャの藝術も時代の產物で、一時的のもので、之を永久的なものと爲すことは出來ない。彼は時間の有限性を意識し、「一時的なものに永久性を附與せんとするはこれ卽ち時間の本質を滅し、その有限性を破壞するもの」に外ならずとしたのであつた。

現代の文化を標準とする事も、過去のある民族を理想とすることも、以上述べたやうに、彼の立場からは爲し得る所ではなかつた。併しそればかりではない。又

未來に於て實現せらるべき理想、目的に照らして歴史の過程を規定する事も彼より觀れば爲すべき事ではない。この點に於ても彼の見解は吾人をしてランケを想ひ起さしむるものがある。ランケがフィヒテやヘーゲルに反對したのは、彼等が歴史の終局に實現せらるべき目的を想定し、これに照らして、先天的に歴史の過程を規定したからであるが、かゝる見方に依つてはかのランケが云つたやうに、先の時代は後の時代に mediatisieren することゝなる。しかしながら先の時代は決して後の時代のために存するのではない。如何なる時代も神に對しては直接的なものである。(Jede Epoche ist unmittelbar zu Gott.) ヘルデルがカントの歴史哲學に反對したのも畢竟同一の根據に依るものと云ふことが出來る。尤もかゝる反對の根據となるべき思想はカントによつてその歴史哲學が批評せられて後に生じたものではなく、夙に彼の抱懷する所のものであつた。即ち彼は既に一七七四年(カントのヘルデルを批評する十年前)如何なる事物もそれ自からのために存するもので單に他の爲めの手段ではない (kein Ding ist allein Mittel) ので、各國民は幸福の中點を己れ自からの中に有する事、恰も球のその重點を有するが如きものであ

ると云ふ思想を懷いてゐた。然るにカントは人類の目的たるあらゆる素質、殊にその道德的素質の完全なる實現、又當然これに附隨する幸福は、人類歷史の終局に於て始めて得らるべきものと見做した。この見地よりすればその終局に達するまでの歷史過程は單なる手段であつて、この過程中に在るものは最後の享樂に與る事は出來ない。これは恰も各人が建築の勞務に服しながら而かも己れの建てたる家屋に住むものは他人であつて己れ自らはこれに住む事の出來ないと同じである。之を歷史について云へば先の世代は後の世代の爲に、而して全世代は最後の世代のためにのみ存する事となる。この事に對してはカント自からも怪訝の念を懷いてゐたのではあつたが、而かも人類素質の完全なる實現は歷史の終局に於てしか可能でないとすれば當然之を許さざるべからざることと爲したのである。かゝる見解はヘルデルの立場からは反對せざるを得なかつたのは云ふまでもない。卽ち彼はイデーンの第八編第五章中に於て暗に Was könnte es heissen ……dass der Mensch für den Staat, als das Ziel seines Geschlechts und alle Generationen desselben eigentlich nur für die letzte Generation gemacht sein, die auf dem zerfallenen

Glückseligkeit aller vorhergehenden throne? Der Anblick unserer Mitbrüder auf der Erde, ja selbst die Erfahrung jedes einzelnen Menschenlebens widerlegt diese der schaffenden Vorsehung untergeschobenen Plane. と云ひ、第九編第一章中に於て……dass Tausende etwa nur für Einen, dass alle vergangenen Geschlechter fürs letzte, dass endlich alle Individuum nur für die Gattung d. h. für das Bild eines abstracten Namens hervorgebracht wären? So spielt der Allweise nicht. と云つてゐるが、神は如何なる時代をも他の時代の爲めの手段たらしむるものではない。彼に取つても、ランケの云つたやうに、各時代は神に對して等しく直接的なものであつた。彼は云ふ。In jedem seinen Kinder liebt und fühlt er (Gott) sich mit dem Vatergefühl. と。

之を要するに彼にあつては現代も、過去も、又未來も歴史過程を計る價値の標準とすることは出來ない。歴史は唯それ〴〵の民族や時代の中に這入り、之に同感して始めて正當にその眞を把握することが出來る。何となれば民族や時代は何れもそれに特有な精神を有するものであるからである。ランケは歴史認識は結局 Mitgefühl によるべきものと觀て、大いに之を重んじたのであるが、ヘルデルに於

ても然りで、sympathisieren, mitfühlen, einfühlen, を以て歴史の客觀的考察に缺くべからざるものとした。彼は一七七四年の歴史哲學に於て Man müsste erst der Nation sympathisieren. と云ひ、又 Gehe in das Zeitalter, in die Himmelsgegend, die ganze Geschichte, fühle dich in alles hinein. とも云つてゐる。彼から見れば歴史上の出來事は既定の尺度で計られるべきものではない。各時代、各國民の德と見做す所、幸福と感ずる所のものは同一ではないからである。彼は「人間の性質は哲學者の規定するが如く絶對的にして不變的な幸福を容れる器ではなく、境遇を異にし、要求の異なるに從つて變ずる、いはゞ柔軟なる粘土の如きものである」と云ひ、又「善も常に同一ではない。從つて一形態、一時代の之を掴み得るものではない。故にそれは無數の形態に分たれ、あらゆる世紀を通じて變化する」とも云つてゐる。かくの如き見方を爲す者にとつては神學や哲學の立場から豫め歴史發展の型を造り、この型に依つて歴史を規定する事は歴史記述に於ては許さるべき事ではなかつた。何となればかゝる見方に依つてはこの型にあてはまるもののみ取上げられ、他は悉くそれから除外せらるゝ事となるからである。十九世紀に於てランケやフンボルトが

當時の目的論的歴史哲學に反對したのはかゝる弊害をその取扱ひ方に認めたからであつたが、ヘルデルがそれ以前に於てかの時代の啓蒙哲學に反對したのも同一の立場からであつた。即ち彼は一七七四年の歴史哲學中に於て、時代の推移と倶に德と幸福とは增進するものであると云ふ進歩觀を前提として、これに合ふ事實は之を持上げ、若し無ければこれを捏造し、之に反する事實は或ひは之を縮少し、或は之を默殺し、かくして世界の漸次的改善と云ふ稗史を作り上げる當時の學者に反對し、かゝるものは何人も之を信ぜず、少くとも歴史を知り人情を解するものは之を信ぜずと云つてゐるが、この語は當時の啓蒙學者ヴォルテール、ヒューム、ロバートソンに對する反對であつたのである。

以上述べたやうに、彼は價値的見地よりする歴史の見方に反對したが、又他面に於ては既に先に指摘せるが如く、歴史の抽象的、普遍的な見方にも反對であつた。何となれば彼の求めむとした所のものは歴史的なものゝ單なる輪廓ではなくして個別的な個々の形態をかゝるものとして觀、かくてこれを內的に把握せんとしたからである。歴史的なものとは常に新しきものを創り出し、そしてそれに特有

の形式と特有の存在の仕方とを與へるもので、同一的なもの、反覆的なものは歴史には存しない。故に抽象的概括化は歴史に取つては無力である。普遍的概念や一般的規範では決してその豐富性を摑む事は出來ない。かゝる見地よりして彼は精神の概念を豫め確定して、是れから發展せしめうるものを發展せしめんとする形而上學者に反對した。勿論かゝる事を爲すは容易なことであらうが、併しかくして獲られる歴史は Geschichte des Menschen でこそあれ、決して Geschichte der Menschen ではあり得ない。彼の求むる所のものはむしろこの後者であつた。從つて彼に取つては、歴史哲學者がその研究の基礎となすものは單に抽象的概念でなくして歴史そのものでなければならなかつた。彼は云ふ。Der Philosophie der Geschichte läuft Gefahr, trügliche Resultate zu ziehen, wenn er die zahllosen Facta nicht wenigstens in einiger Allgemeinheit verbindet. と。第十九世紀の歴史には普遍主義的傾向と是に對立する個別主義的傾向とが存するのであるが、以上述べた所からみて彼はこの後者の個別主義的傾向の先驅者であつたと云ふべきである。

以上述べた來たヘルデルの歴史認識の根柢には歴史そのものゝ存在の仕方に

關する、いはゞかの存在論的規定とも云はれ得べきものが存する。リットは彼の歴史哲學を主としてその一七七四年の歴史哲學に依つて說き、ヘルデル自からは明かに意識せざるにしても、その中に歴史的生命の構造と見らるべきものありと爲し、これを『時間』の問題に關係せしめて論じてゐるのであるが、ヘルデルに於ては時間の問題は確かに重要なる意味を有するもので、之をその內容との關係について考察すれば、この兩者は決して沒交涉ではない。卽ち時間は抽象的な、空虛な、その內容に對して無頓着な媒質でもなければ、逆に內容は時間に對して無頓着な抽象的普遍でもない。換言すれば一定の時間には一定の內容が共屬してゐるのであつて、この內容を例へばAの時間から遊離せしめて之をBの時間に移し容れ得るものではない。それは決して抽象せられた精神の普遍的な場に在るものではなくして、歴史的過程に於ては唯一の時限內に存するものである。この點から見て歴史上の出來事は繰返す事なき唯一回限りのものであると云へるのである。然乍ら歴史の存在の仕方に於て重要なるは單に時間のみではない。場所も亦等しく重要なる役割を演ずる。歴史は時間と俱に變ずるが如く場所を異にするに

從つて同一ではない。從つて文化は之を歴史的に觀れば場所と沒交渉に存するのではなくして、この兩者は亦共屬の關係を爲すものである。彼が Raubet man den Völkern ihr Land: so hat man ihnen alles geraubet. とさへ云つてゐるのもそれが爲である。彼は風土の歴史に及ぼす影響の重要性を認めてゐたことは何人も知る所であると思ふが、併し歴史の一切は風土に依つて左右せられるものであらうか。民族の特有性、その個性と云ふが如きものも風土に影響せられて後始めて生じたものであらうか。彼は das eine Menschengeschlecht hat sich allenthalben auf der Erde klimatisiert. と云つてゐる所から見れば初めに一人類なるものがあり、それが風土化して諸民族が生成したものであるかの如く解せられないではない。併しこゝに一人類と云ふのは他の動物と比較しての事であつて、人類の中に多樣性の存することを必ずしも排斥することゝはならない。勿論この多樣性は可能的なものとして存するので、それが實現せざる間はその多樣なる事も明かでないであらう。又その實現に風土の影響することも否定し得ない。併し homogeneous な一人類が風土化せられて多樣な民族に分化すると見るを要しない。各民族はそれ〴〵そ

れに特有なる文化を發展すべき素質は具有せるものと見るべきではないか。勿論彼は人類一般と民族との關係について明かに云つてゐる所はないやうであるが、併し彼は Wunderbare, seltsame Sache überhaupt ists um das, was genetischer Geist und Charakter eines Volkes heisst; er ist unerklärlich und unauslöschlich. と云つてゐる所から見れば彼は始めから民族の異質性を認めてゐたものと推定することが出來る。彼は Genius des Volkes と云つてゐるが、これは民族の個性を意味するものに外ならない。尤もかゝる個性は完成せられたる狀態に於て民族に具つてゐるのではない。民族に生得的なものはその素質で、之が時間と場所と他の民族との交互作用に於て漸次に生成するものである。故に民族の個性を拔きにして單に時間と場所のみからその民族の歷史を解することは出來ない。彼が Ideen の中に於て、殊にその後半、諸民族の歷史を述ぶる場合、到る處に Ort, Zeit und der Charakter der Nation とか、National-, Zeit-und Ortumstände とか、Durch Zeit, Ort und die den Völkern einwohnenden Kräfte とか云ふ言葉を繰返してゐるのも、それ等が歷史を決定する三要素であると見做したからである。かくの如く歷史上の出來事は時間と場所と

民族性とによつて定まるものであるから普遍的な概念によつては到底その認識は不可能である。之を眞に理解せんとするものはそれ〴〵の時代に於ける國民の歴史の中に飛込み、これと同感せねばならぬ。彼が先に述べたやうに sympathisieren, einfühlen を主張するのもその爲である。

これ迄述べて來た所から明かであらうと思ふが、彼には一切の價値的見地から離れ、各民族、各時代の歴史をそれがある通りに、純客觀的に考察せんとする傾向が存した。彼から見れば豫め主觀的に一定の概念を構成し、これを通して、現實としての歴史を觀んとするは、die Sache, die ist oder geschieht, durch die andere, die nicht ist, zu erklären streben に外ならぬものであつた。彼の努力せんとせし所は史的發展を本來、民族に内在する發生的(ゲネティッシュ)な力と外部からはたらく自然的な力との交互作用から說明することであつた。彼は人間史を以て自然史なりと規定してゐるが、それは單に人間は自然の一部であり、自然を支配する法則は又人間の歴史をも支配すると見たからのみではない。勿論彼がかゝる見解を抱くに至つたと云ふことは、その時代の自然觀の影響によるには相違ないが、しかしそれは又一面に於て

は價値論的、目的論的歴史觀に反對せんが爲であつた。彼は Die Philosophie der Endzwecke ist der Naturgeschichte keinen Vorteil gebracht, sondern ihre Liebhaber vielmehr statt der Untersuchung mit scheinbarem Wahn befriedigt. と云つてゐる程で、目的論的歴史哲學には極力反對してゐたのであるが、この點に於て吾人の念頭に浮び來るものはフンボルトである。フンボルトも世界史を動かす力、卽ちその動因の研究を以て歴史の Physik と名づけ、かくて彼はこれを究めんとしたのであるが、それは結局歴史に於て實現せらるべき終局目的に照して史的發展を考察する時は、彼の所謂「歴史の眞」は到底之を把捉することは出來ないからのことであつた。ヘルデルがフンボルトに先んじて人間史を自然史と見ようとする動機の一つはたしかにそこにあつたものといふことが出來る。(勿論フンボルトが動因と見做すものとヘルデルの力と稱するものとの同一でないことは云ふ迄もないが、しかし前者が Physik を、後者が自然史を提唱する動機に於ては一致する所がある。)しかし彼が力の方面から歴史を觀ようとしたのは、只かの八十年代の Ideen に於て丈けではなかつた。かゝる傾向の萠芽は已に早く一七七四年の歴史哲學の草案中に存す

るのである。即ち彼はこの草案中に於て德とか幸福とか云ふが如きものに觀點をおいて歷史を考察せんとする當時の思想傾向に反對して、Wir suchen und wägen Kräfte, nicht die Schattenbild ihrer Abstraktionen und Folgen, die sich vielleicht mit jedem Strahl der Sonne ändern. と云つてゐるのであるが、この言葉に徵しても彼は價値論的な見方に對して、歷史上の出來事を、これをしてしかあらしむる力の方面から考察せんとしてゐたことが明かである。

彼の歷史に對する態度には史的事實を純粹にかゝるものとして見よう、偏見や先入見に囚はるゝことなく、冷靜に之を觀察しようと云ふが如き、云はゞ純然たる史家の立脚地からこれを究めようとする傾向のあつたことは確かである。しかしそれは要するに彼の歷史考察の態度の一方面に過ぎなかつたことは云ふ迄もないことである。何となれば彼は歷史研究家たると共に哲學者であり、神學者であり、宗教家であり、兼て又人類の倫理的教育を以てその任務としてゐたからである。しかし彼は神學者、哲學者、倫理教育家としては、只史實の眞を把握せんとする史家の態度で歷史にのぞむことは無論出來ない、やはり歷史の意味、目的と云ふが

如きものをも究めねばならなかつた。彼は宗教家として「神の歩み」を歴史に求めんとした。否基督教の立場から歴史哲學をさへ書かんとした。勿論彼は神をして直接的に歴史に干渉せしむることはしなかつた。しかし彼は自然を通して歴史に神をはたらかしめた。彼にとつては自然法は同時に神的なものであつたのである。彼は又先きに述べたやうに民族の個性を重んじながら、これと同時に人間一般を特性づける Humanität に着眼し、これを以て實現せらるべき筈のものとして、そこに歴史の意義と價値とを認めたのであるが、これは倫理教育家として當然のことであつた。彼は實にこの Humanität の概念を以て八十年代の歴史哲學の基柱となしたのである。勿論それ以前に於てもかゝる思想はないではなかつたが、しかし歴史哲學の中心思想をなすに至つたのは八十年代及びそれ以後卽ちかの Ideen や Briefe に於てゞあつた。さうしてそこに後の歴史哲學の本領とも云ふべきものが見出さるゝのであるが、然らばこの Humanität の概念は如何なる內容を有するものであるか。何故に彼は特にこの概念を以て八十年代の歴史哲學の基柱となしたのであるか。この價値的概念は彼の自然觀と如何に關係せしめら

るべきであるか。又このHumanitätの考が彼の民族や國民の思想と如何に調和せしめらるべきであるか。これ等の問題は「歴史哲學者としてのヘルデル」に於て解かるべき課題に屬する。